

「カリブ海に、白い砂浜!!」

それが、青年海外協力隊の派遣先が決まった時点でのエルサルバドルの印象でした。つまり、その時点でエルサルバドルの正確な位置さえも把握していなかったのです。それが、青年海外協力隊、そして大使館の草の根無償資金協力の外部委嘱員として約4年過ごすことになるとは…。

今回、当時お世話になった大使館職員の方から HP への寄稿を頼まれ、当時を思い出しながら、何をテーマに書こうかと考えました。92 年内戦が終結してから 10 年、市民の心に戦時中の爪痕が残る中、市民は ARENA 派と FMLN 派に分かれ、毎日のように MALAS の抗争のニュースが紙面に載るなど、治安にかなりの不安が残る時期でした。その様な中でも、国内の色々なところに足を運んだりもした思い出もありますが、最も印象深いのは「人との出会い」です。

派遣される前、エルサルバドルが「中米の日本」と評されていることを知りました。そんな中、私は「そんなことはないだろう」と高をくくっていました。

しかし、青年海外協力隊の派遣先・国立農業学校（ENA）では、さすがに全員ではないですが、少ない予算でも良い人材を輩出しようとするスタッフの情熱に触れ、将来のエルサルバドルの農林業を下支えするだろう若き原石（学生）たちとも出逢えました。離任の際、彼らに「いつか、国際協力の分野の中で、エルサルバドルと一緒に仕事をしよう」と別れましたが、未だに私の力不足で叶っていません。一方、今なお SNS で彼らとつながっていることもあって、NGO や政府機関等に所属し、農家の皆さんを指導する立場としてエルサルバドルの農業に携わっている彼らの姿に、いつも良い刺激を受けています。

今回、草の根外部委嘱員の職務の中で携わった市長たちと NGO スタッフのダビッドさんについて書きたいと思います。当時、大使館では草の根無償資金協力のスキームを使って、MDGs（今流行りの SDGs 以前の開発目標）に沿って、都市部・農村部の小学校を中心とした学校施設の整備と、安心安全な水の確保を目的とした上水道整備の支援を主に行っていました。



現場では、市役所で市長を含めた市の関係者との打合せ後、そのままの流れで畑や森を通して水源や工事現場に足を運ぶことも度々ありました。現地調査が打合せ直後というのがミソで、私もついつい関係者の前で「あれ？市長も現地調査に同行しないの？」と聞いてしまうので、こうなると市長も逃げられませんよね(笑)。

夏の真昼間に現地調査に同行した市長が、人気がない森の中だからといってシャツを脱いで歩いていたのを見つけて、市長に、「次回の選挙ポスターに使う写真撮ってどうか？」と冗談を言ったりしたこともありました。この様な私の態度・性格が功を奏したのかは分かりませんが、市長から市民に対する強い責任や想いについて話を聞かせてもらう機会が多くありました。

また、書類申請に向けた追い込みの時期（私が書類の作成で大使館から動けない時期）、数日間に渡って片道 100 km以上離れた市から日本大使館に通った市長及び関係者もありました。私が市長の立場なら、「もういいよ」と諦めていたと思いますが、彼らは市民のために支援を取り付けたいと最後まで諦めず、申請に間に合わせてくれました。

当時、国内の各市は、年間予算が決して潤沢ではないにもかかわらず、市民の生活改善に直結する、是々非々で必要なインフラ整備を数多く抱えていました。加えて、数千人の人口を抱える市でも、十数人で行政運営をする等、予算だけではなく人員的にも限りがありました。

市にとって、日本をはじめとした各国の支援を受けるか否かは、その市・市民にとって大きかったと思います。市長をはじめ市の職員が「苦しんでいる住民のために何とかしたい」と市が抱える課題に正面から向き合い、情熱を持って対応している姿に、私も「何とかしたい」と強く思ったことが一度や二度ではありませんでした。



個人名を出してしまいましたが、NGO スタッフのダビッドさんは、仕事上のパートナーであり、恩師の一人でもあります。



当時、全国各地に数多くのプロジェクトサイトを持っていた大使館にとって、業務の遂行を円滑化に遂行するためには現場の進捗状況を把握している NGO 等と協力が必要不可欠でした。彼の所属する NGO も協力してくれた NGO のひとつでした。今の様にインターネットも十分整備されていない頃だったので、彼とはほぼ毎日電話で連絡をとり、現場で問題が発生すればふたりで現場に乗り込んで、関係者と話し合いを重ねて解決策を導き出していました。

恩師のひとりと書いたのは、彼の住民に対峙する姿勢から学ぶことが多かったからです。

そのひとつが、住民の気持ちが醸成するまで待つ姿・忍耐強さです。住民に寄り添う彼は、自身の NGO や大使館側で支援できる範囲を説明した上で、常に優しい眼差しで住民の話に耳を傾け、時に必要に応じた助言や提案はするものの深入りはせず、住民が自ら何が出来るのかを考えるまで待つ姿勢を崩すことはありませんでした。

学校建設のプロジェクトの場合であれば、子どもの親として何が出来るのか、子どもに残せる愛情の形は何なのかを親たちに問う。私も彼も支援の必要性を重々認識しつつ住民や関係者に当事者意識がない場合には、彼から「一年待ってくれ。その間に小さなインフラ事業を NGO 側で入れて、住民の当事者意識の醸成と組織づくりをやってみる。その結果次第で、来年度支援を行うか判断して欲しい。」と住民の変容を期待した提案をしてくれたことも少なくありませんでした。

彼には多くの場面で助けてもらいました。彼には感謝しかありません。

エルサルバドルへの支援は、日本側の気持ちや行動だけでは成し遂げられません。支援はあくまでもツールでしかないこと、住民やそれをサポートする行政や NGO 等、数多くの住民のくらしの向上に対する本気が多くの結果をもたらしているのだということを4年の経験を経て強く感じました。

今後のエルサルバドルの発展に大いに期待したいと思います。また、お世話になった方々や教え子と仕事の場で再会出来たらと思います。



岡林勇航（おかばやし ゆうこう）氏

青年海外協力隊（14 年度 2 次隊）として国立農業学校に配属。その後、在エルサルバドル日本大使館の草の根無償資金協力の外部委嘱員として勤務。現在は民間コンサルタントとして国際協力に携わる。※ここ数年は熊本地震、令和 2 年 7 月豪雨の被災地の復興支援に携わる。